

世界を撮り辿り着いた、美しき辺境。

写真家・藤井保が見る、 山陰の美と可能性。

本紙の表紙と裏表紙を飾る、一对の写真。今年東京から、石見銀山のある大田市大森町へ拠点を移した写真家、藤井保さんによる撮りおろし作品だ。『広告写真の第一人者』『空気を撮る写真家』と呼ばれ、世界中の風景を撮り続けてきたトップクリエイターが、なぜ山間の集落を選んだのか。その思いとともに、写真家として見た山陰の魅力を語ってくれた。

生まれ育った土地を受け入れたら、世界がよく見えるようになった。

――藤井さんは、日清カップヌードルや無印良品、マグライトなど、日本の広告史に残る仕事で知られる写真家です。ルーツを遡ると、ご出身が島根県なんですね。

大田市の三瓶山のふもとにある池田町で生まれ、大田高校の写真部に入りました。卒業後は横浜の学校で写真を学んだのですが、若い頃は都会への憧れもあったし、島根出身ということコンプレックスに感じていましたね。ファッション写真に興味を持って調べていくと、ヴォーグパリなどを見るヨーロッパの写真家がお手本になるのですが、向こうはパリやロンドンという都会、こっちは島根県ですよ。物理的にも心理的にもかなり距離がありますよね（笑）。

――確かに、島根とヨーロッパだとイメージは違いますよね。でも、コンプレックスだった山陰や島根の見え方が変わった瞬間があったんですか？

20代で独立して、東京で写真の仕事をしていたのですが、今から35年ほど前に地元の池田町を撮影したことがあります。親父が再婚して家が変わっていくように感じたのもあって、生まれ育った風景を撮っておこうと。それは、島根という自分の出身地を受け入れる体験でもありました。自分の出自を受け入れ、その上で自分なりの表現をしようという。海外の都会に憧れるのではなくてね。生まれた土地を受け入れたら世界がよく見えるようになったし、見栄や虚栄心から解放されて、撮る写真も変わったと思います。

その風景の中にその人がいる、そこに意味がある。

――藤井さんの写真は「空気が写る」とも言われ、幻想的なタッチで知られています。そうした独自の作風には、山陰で育った影響もあるのでしょうか。

どうでしょう、特に意識したことはないけれど、雪や雨、霧の風景は好きですし、厳しさの中で感じるものを大切にしている部分はあるかもしれません。例えばハワイは僕も何度も訪れていて、いい場所ですが「ずっとここには住めない」という感じはするんです。明るく快適な環境に長くいると、自分が鈍る感じがするというか。

――そうした観点から見ると、山陰の風景や気候はどんな特徴がありますか？

山陰は季節による風景の違いが極端に見えやすい場所だと感じます。冬と夏の海の違いも、はっきりとわかる。植田正治（※）さんはヨーロッパでは今でも日本人で一番評価されている写真家ですが、それがそんな世界的な写真家が、生涯島根県で撮り続けたというのも面白いですね。あの人は鳥取砂丘が自分のオーフンスタジオ。そこには山陰の光も関係しているでしょう。

――藤井さんにとって山陰の光の魅力って、どんなところですか？

山陰の光はドラマチックですよ。出雲って、雲が出ると書くでしょう。実際に雲が多いですが、そこに光が入ると、すごくいい。僕は海外に行くといつも現地の絵葉書を買います。それは、絵葉書にその土地の光が描かれているから。例えばさっきのハワイを例に出すと、ハワイの絵葉書って色が出すぎていてコントラストが強いです。下手な絵だなと思うけれど、ハワイの夕日を実際に見ると、絵葉書と同じように鮮やかなんです。湿度が高いスコットランドなんか、絵葉書もいいんですよ。そういうものが風土だし、風景は風土から生まれるものです。



昭和61年発行「ふる里の写真館」より

――藤井さんの独特の写真は、そうした風土との関係の中で生まれているんですね。

僕が思う写真というのは、肉眼で見える世界を複写するのではなく、自分がどう見たかを表現すること。その瞬間しか存在しない空気感というものがあって、同じ風景でも同じ写真は二度と撮れません。人を撮るにしても被写体と自分の間にある空気、そこが瞬間ごとに動くわけです。その風景と空気の中に、その人がいることに意味があるし、そのことはいつも意識しています。

大森町は美しい風景の中に人々の誇りが見える。

――山陰への移住についても、聞かせてください。藤井さんは広告写真の第一人者として活躍してきた、突然島根に移り住むと決めた。きっかけは何だったんですか？

1、2年ほど前から考え始めたのですが、「コロナも遠因のひとつです。それから、僕が仕事をしてきた広告の世界や、世の中の風潮が変わってきたと感じたこともひとつ。このまま東京で働き続けることは、ある意味でこれまで自分が築いてきた仕事を傷つけることになるかもしれないと感じたんです。

――そして今年の2月、石見銀山のある大森町へと拠点を移されました。

僕は日本も海外も本場にしているような場所の写真を撮ってきました。よく「番理想的な場所はどこですか？」と、聞かれるのですが、その答えは難しく、絶対的な理想郷ってどこにもないです。ただ、その土地に暮らす人が誇りを持っていることは、とても大切。大森町は生まれ育った大田市というところもあるけれど、一番の魅力は人でしょう。人々が自分の暮らしにプライドを持ち、それが美しい風景の中に見える。それを見ることは、写真家の仕事でもあります。